

幼児の仲間関係に関する研究

——仲間内地位と社会成熟度・有能感・受容感・母親の発達期待——

前 田 健 一

(幼児心理学研究室)

(平成元年10月9日受理)

社会的・認知的発達に関する最近の研究は、どのような社会的・認知的スキルが有効な社会的コンピテンスと関連するかという問題に関心を寄せてきた。それによると、社会的にコンピテントな子どもとコンピテントでない子どもとでは、種々の社会的・認知的側面で異なることが報告されている(Hartup, 1983; Hymel & Rubin, 1985)。また、社会的スキル訓練の研究は、社会的・認知的スキルが対人的コンピテンスとの間に因果関係をもつことを実証してきた(Conger & Keane, 1981; Urbain & Kendall, 1980; Weissberg, Gesten, Rapkin, Cowen, Davidson, Flores de Apodaca, & Mckim, 1981)。しかしながら、社会的コンピテンスの定義は研究者によって多様である。共通して社会的相互作用の側面を強調しているけれども、何を主要な構成要素と考えるかという理論的・概念的レベルでは大きく異なっている。例えば、ある研究者は主張性(Bornstein, Bellack, & Hersen, 1977)や相互作用の頻度(Furman, Rahe, & Hartup, 1979; Rubin, 1982)を強調し、他の研究者は子どもの自己概念(Harter, 1982)や役割取得能力などの認知的能力(Gottman, Gonso, & Rasmussen, 1975)を強調する。Zigler and Trickett(1978)は、社会的コンピテンスの構成要素として、①身体的健康、②認知能力、③達成成績(学業成績、言語能力など)、④動機づけ・情緒の変数を挙げている。さらに④には、有能性への動機づけ(effectance motivation)、社会的強化への反応性、統制位置、成功期待、言語的な注意喚起行動、自己イメージ、学習性無力感、学校に対する態度、創造性などを含めている。社会的コンピテンスは、このように多様な要素から成る構成概念であり、現在定義上のコンセンサスも得られていない。

多くの研究者は、社会的にコンピテントな子どもとそうでない子どもを識別するために、次の情報源に頼っているのが現状である。①子どもの行動観察、②仲間、教師、親などからの情報、③子どもの自己報告測定。これらの情報を利用した研究は多くの知見をもたらしたが、同時に研究間で一致しない結果も多々見られる。一致しない原因の1つは、研究の目的に応じて異なる対象児を選出しているからではないかと考えられる。社会的コンピテンスが多様な要素から成るのであれば、同一の対象児集団について子どもの仲間適応と社会的・認知的能力との関連を多面的に調べる必要があると思われる。

前田(1988 a, 1988 b, 1989 b)は、同一幼児集団を対象に仲間内地位と関連する社会的・認知的特徴を多面的に捉えようと試みてきた。仲間からの情報として最も多く採用されているソシオメトリック法を使用して仲間内地位を決定し、道徳判断課題の成績や知能検査結果(前田, 1988 a), 友人関係の理解度(前田, 1989 b), 統制の位置(前田, 1988 b)との関連を検討してきた。その結果、人気児、拒否児、平均児の3グループは、知能や道徳判断成績に差がなかった。しか

し、人気児は拒否児よりも友人の友人関係をよく把握していた。また、統制の位置では人気児が拒否児よりも高い内的統制を示した。これらの結果を蓄積することから、それぞれの仲間関係を営んでいる幼児の個人差を総合的に理解することが可能になると考えられる。本研究は、これら一連の研究の一環として幼児自身が自分の有能感や受容感をどのように認知しているのか、またその自己認知が仲間内地位グループによってどのように異なるのかを検討する。また、母親に対して子どもの社会成熟度検査と発達期待調査を実施し、母親による社会成熟度の評定や発達期待とその子どもの仲間内地位との関連を検討する。

方 法

対象児

愛媛大学教育学部附属幼稚園の年中児32名と年長児29名を対象とした。その平均年齢と範囲は年中児が5歳2か月（4歳8か月～5歳7か月）で、年長児が6歳3か月（5歳9か月～6歳7か月）であった。年齢は1987年11月20日時点で算出した。表1は、これらの幼児を対象に実施した写真ソシオメトリックテストの結果に基づいて分類した各仲間内地位グループの人数内訳を示したものである。

表1 対象児の内訳

地位グループ	分類基準	年中児			年長児		
		男	女	計	男	女	計
人気児	$SP > 1, L > 0, D < 0$	3	4	7	3	5	8
拒否児	$SP < -1, L < 0, D > 0$	3	3	6	3	5	8
平均児	$-1 < SP < 1, -1 < SI < 1$	6	5	11	6	3	9
無視児	$SI < -1, L < 0, D < 0$	2	3	5	2	2	4
敵味方児	$SI > 1, L > 0, D > 0$	2	1	3	0	0	0
	計	16	16	32	14	15	29

実施時期

社会成熟度診断検査は1987年7月8日～7月13日の期間に、幼児に対する写真ソシオメトリックテストと有能感・受容感の調査は1987年11月16日～11月24日の期間に、母親の発達期待調査は1987年12月3日～12月7日の期間に実施された。

材 料

- (1) 田研式社会成熟度診断検査 この検査は、鈴木(1961)によって標準化され、3歳0か月～6歳11か月までの幼児の社会成熟度を調べる検査である。第1部の社会生活能力は「仕事の能力」、「からだのこなし」、「ことば」、「集団への参加」、「自発性」、「自己統制」の6領域からなり、各領域20項目の質問で構成されている。第2部の基本的習慣は「清潔」、「排泄」、「着衣」、「睡眠」、「食事」の5領域からなり、「食事」領域が20項目、その他の4領域は10項目の質問から構成されている。各質問に対して、「できる」、「できるだろう」、「できない」、「できないだろう」のいずれかに○印をつけて回答することになっている。回答結果に基づいて社会成熟年齢や社会成熟度指数を算出できるようになっているが、本研究では粗点をそのまま使用した。

- (2) 写真ソシオメトリックテスト 写真は、1人で壁を背に立っている姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5cm×横4cmの大きさにプリントしたものであった。各幼児の写真を1枚ずつ縦6.5cm×横5cmの白色厚紙に貼りつけて、写真カードを作成した。なお、写真カードの下部には、各幼児の名前を上下逆転して小さい字で記入し、調査者が読めるようにしておいた。
- (3) 有能感・受容感の調査 桜井・杉原(1985)を参考に作成した調査項目を幼稚園の担当教師と検討し、幼児の実態よりも少し困難度が高い項目に修正した。表2は、本研究で使用した28項目である。これら28項目は、学習面の有能感、運動面の有能感、仲間からの受容感、母親からの受容感の4つの下位尺度に分かれ、各尺度それぞれ7項目ずつから構成されている。
- (4) 母親の発達期待調査 東・柏木・ヘス(1981)の質問項目を参考に、社会成熟度検査結果や桜井・杉原(1985)の結果を考慮して、一部修正したものを作成した(表3参照)。質問項目は、学習、従順・自立、社会的スキル、言語的主張の4つの領域から構成され、各領域につき5項目ずつ含まれた。

表2 幼児の有能感・受容感の調査項目

尺度	質問内容
学習面の有能感	1 折り紙が上手に折れますか。
	2 お絵かきは上手ですか。
	3 絵本を上手に読めますか。
	4 自分の名前を上手に書けますか。
	5 いろいろな曜日の名前が言えますか。
	6 自分のお家の住所がきちんと言えますか。
	7 一年のうちの4つの季節の名前が言えますか。
運動面の有能感	8 鉄棒で前回りが上手にできますか。
	9 でんぐり返しが上手にできますか。
	10 高い所から恐がらずに飛び降りられますか。
	11 お弁当包みをきれいに包むことができますか。
	12 金槌で釘を打つことができますか。
	13 おはしを使って、ご飯をこぼさないように食べられますか。
	14 もし、〇〇ちゃんがローラースケートをしてみたら、すぐにできるようになると思いますか。
仲間からの受容感	15 〇〇ちゃんのお家に遊びに来るお友達はたくさんいますか。
	16 お友達から「一緒に遊ぼう」とよく誘われますか。
	17 もし、幼稚園で靴をなくしてしまったら、一緒に探してくれるお友達がいますか。
	18 〇〇ちゃんは、お友達のお家へよく遊びに行きますか。
	19 幼稚園で△△組さんのみんなと一緒に遊ぶのが好きですか。
	20 かけっこやゲームをしているお友達の中に、〇〇ちゃんもすぐに寄せてもらえますか。
	21 幼稚園で〇〇ちゃんと遊びたいって言うお友達はたくさんいますか。
母親からの受容感	22 お母さんは、よく〇〇ちゃんに笑いかけてくれますか。
	23 お母さんは、〇〇ちゃんの行きたい所へ連れて行ってくれますか。
	24 お母さんは、おいしい食べ物を〇〇ちゃんのためによく作ってくれますか。
	25 お母さんは、よく絵本を読んでくれますか。
	26 お母さんは、〇〇ちゃんが良い子にしていたとき、ほめてくれますか。
	27 お母さんは、よく遊んでくれますか。
	28 お母さんは、〇〇ちゃんに楽しいお話をたくさんしてくれますか。

手 続 き

幼児に対する写真ソシオメトリックテストと有能感・受容感の調査は、個別面接で以下の順に別の日に実施された。テスト間隔は1日～2日である。また社会成熟度診断検査は市販の検査用紙を、母親の発達期待調査は表3の質問内容を印刷した調査用紙を上記期間中にそれぞれ担任教師から各家庭に配布してもらい後日幼稚園で回収した。

(1) 写真ソシオメトリックテスト 各対象児と同一クラスの同性仲間全員の写真カードを机上に縦4列×横4行(約縦30cm×横20cmの広さ)に配列して提示し、仲間の写真カードを順に指さして仲間の名前と写真を一致させ得るか否かを確認した。この結果、すべての幼児が同性仲間全員の名前を言えた。次に、配列中から対象児自身の写真カードを取り出して対象児の左横に置き、残りの写真カード全部を指さしながら、「この中で〇〇ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番(2番目に、3番目に)一緒に遊びたい人は誰ですか。」と質問した。その際、対象児が指さした仲間の写真カードはその都度裏返して置き、残りの写真カードの中から2番目、3番目に遊びたい人を選ばせた。

遊びたい人3名の選択が終了すると、すべての写真カードを表向けにし、次の教示を与えて、一緒に遊びたくない人3名を順に選ばせた。「今度はこの中で、〇〇ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番(2番目に、3番目に)一緒に遊びたくない人は誰ですか。」

(2) 有能感・受容感の調査 各幼児に対して次の教示を与え、各質問を表2の順序で行った。「これから、〇〇ちゃんにいろいろなことを聞きます。よく聞いて、〇〇ちゃんが思った通りに『はい』か『いいえ』で答えて下さい。」各質問の中で語句の意味が分からないと思われる場合(例

表3 母親の発達期待に関する質問項目

問	内 容	領 域
1	ひらがなが読めるようになり、絵本をすすんで読む。	学 習
2	自分の身のまわりのことは、できるだけ自分の力でする。	従順・自立
3	グループの中で友達と助け合って遊んだり仕事ができ、約束やルールを守ることができる。	社会的スキル
4	してもらいたいこと、困ったことなどについて、自分の要求を相手に伝えることができる。	言語的主張
5	父母や先生などに言われたことを素直に聞く。	従順・自立
6	友達と遊ぶとき、リーダーシップをとれる。	社会的スキル
7	興味のあること、わからないことは、自分で本を読んで調べる。	学 習
8	身近な人に日常のあいさつをする。	言語的主張
9	あかちゃん言葉を使わなくなり、正しい言葉で話せるようになる。	学 習
10	食事の手伝いやゴミを捨てるなど、家のお伝いができる。	従順・自立
11	クラスやグループの中で、自分の役割に応じた仕事ができる。	社会的スキル
12	人の話をよく聞き、わからないことは、すすんで聞こうとする。	言語的主張
13	友達や小さい子に対して思いやりのある行動がとれる。	社会的スキル
14	クラスやグループの中で、みんなの前にすすんで出て行き、上手にお話をするができる。	言語的主張
15	上手に絵をかいたり、物を作ったりすることができる。	学 習
16	遊んだ後、子どもなりに後かたづけをすることができる。	従順・自立
17	自分の名前や住所がはっきり言える。	学 習
18	食事のとき、上手に「はし」を使ってこぼさないように食べる。	従順・自立
19	順番や約束を守らない子がいたら、その子に注意することができる。	言語的主張
20	友達が困っていたらすすんで助けたり、親切にされたら感謝やお礼を言うことができる。	社会的スキル

えば、曜日とか季節)については、1つだけ例を挙げて説明を加えた。

- (3) 母親の発達期待調査 表3の20項目の中から、「子どもを育て、しつけていく上で特に重要だと考えているもの」を5つ選んでもらった。そして、その重要度に従って第1番目～第5番目まで順位づけた回答欄に該当項目番号を記入してもらった。次に、同じ20項目の中から、「それほど厳しくしつけなくてもよい、できなくてもあまり気にならないもの」を5つ選び、第1番目に気にかからない項目～第5番目までの項目を順位づけて回答してもらった。

仲間内地位グループの分類方法

Coie, Dodge, and Coppotelli(1982)を一部改良したCoie and Dodge(1988)の方法に従った。まず、幼児ごとに肯定的指名数と否定的指名数を集計した。次に、各指名数を各クラスの男女別に当該幼児を除く残りの人数で除算し、1人当りの平均指名数を算出し、それをクラス別に標準得点化した。この2つの標準得点(肯定的指名得点=L, 否定的指名得点=D)から、社会的好み得点($SP = L - D$)と社会的影響力得点($SI = L + D$)を算出した。これらの得点を基に、表1の分類基準に従って各地位グループを選出した。

結 果

社会成熟度については、「できる」と「できるだろう」の回答に1点を、「できない」と「できないだろう」の回答に0点を配点し、領域ごとに粗点の合計を算出した。社会生活能力の各領域と基本的習慣の「食事」領域は20点満点であり、基本的習慣の残り4領域は10点満点である。有能感と受容感については、各質問に対して「はい」の回答に1点を、「いいえ」の回答に0点を与えた。各7点満点である。母親の期待得点については、次のような得点化を行った。まず学習と従順・自立の項目は個人的能力とし、社会的スキルと言語的主張は対人的能力として大別した。母親が対人的能力に関する項目を重要なものとして挙げた数十個の個人的能力に関する項目を重要なものとして挙げた数を合計し、対人的能力重視得点とした。したがって、10点満点である。

仲間内地位グループ間の比較

- (1) 社会成熟度 表4は、社会生活能力の領域別に人気児、拒否児、平均児、無視児グループの平均粗点と標準偏差(SD)を示したものである。各粗点について2(年齢)×4(グループ)の分散分析をした。その結果、年齢の主効果は「仕事の能力」 $F(1,50) = 9.05, p < .01$ で年中児($M = 13.98$) < 年長児($M = 16.29$)、「からだのこなし」 $F(1,50) = 9.96, p < .01$ で年中児($M = 14.62$) < 年長児($M = 16.54$)、「集団への参加」 $F(1,50) = 2.84, .10 > p > .05$ で年中児($M = 16.40$) < 年長児($M = 17.68$)の傾向を示し、「社会生活能力の合計」 $F(1,50) = 4.13, p < .05$ で年中児($M = 91.45$) < 年長児($M = 99.04$)であった。

地位グループの主効果は「ことば」の領域のみで有意であり、 $F(3,50) = 3.73, p < .05$ となった。各グループの平均値は大きい順に拒否児($M = 17.57$)、人気児($M = 16.73$)、平均児($M = 15.70$)、無視児($M = 15.33$)であった。Duncanのmultiple range testによる多重比較をした結果、拒否児 > 平均児 = 無視児となった。しかし、人気児はいずれのグループとも有意差がなかった。なお、「自発性」と「自己統制」ではいずれの主効果も交互作用も有意でなかった。

表4 各地位グループの社会生活能力の各平均値

() 内はSD

年齢	地位グループ	N	仕事の 能力	からだの こなし	ことば	集団へ の参加	自発性	自己統制	合計
年中児	人気児	7	13.79 (4.03)	14.29 (1.75)	15.57 (2.06)	16.43 (1.92)	14.93 (1.43)	14.43 (2.06)	89.43 (9.56)
	拒否児	6	15.00 (1.83)	15.17 (2.48)	16.83 (1.95)	17.17 (2.41)	17.50 (2.06)	17.00 (2.38)	98.67 (9.66)
	平均児	11	13.86 (2.92)	14.55 (2.35)	15.64 (1.97)	15.77 (3.42)	15.23 (3.16)	14.05 (3.89)	89.09 (15.30)
	無視児	5	13.30 (1.89)	14.60 (0.49)	15.80 (1.17)	16.80 (1.94)	15.80 (1.60)	14.50 (3.07)	90.80 (7.80)
年長児	人気児	8	16.13 (2.62)	15.69 (2.14)	17.75 (1.30)	17.38 (2.64)	17.38 (2.96)	16.25 (3.31)	100.56 (12.94)
	拒否児	8	17.81 (1.32)	18.13 (1.45)	18.13 (1.36)	18.00 (1.22)	17.06 (2.79)	15.25 (3.27)	104.38 (8.53)
	平均児	9	15.33 (2.40)	16.11 (1.97)	15.78 (1.40)	17.56 (1.42)	15.22 (1.69)	15.06 (3.34)	95.06 (7.57)
	無視児	4	15.75 (1.48)	16.00 (1.87)	14.75 (2.49)	17.88 (2.13)	15.63 (3.07)	14.25 (2.59)	94.25 (9.60)

表5 各地位グループの基本的習慣の各平均値

() 内はSD

年齢	グループ	N	清潔	排泄	着衣	睡眠	食事	合計
年中児	人気児	7	8.00 (1.41)	8.57 (1.50)	9.00 (0.76)	8.14 (1.25)	16.50 (1.63)	50.21 (4.67)
	拒否児	6	8.83 (0.69)	8.50 (2.14)	9.50 (0.76)	8.67 (1.37)	17.00 (2.58)	52.50 (6.92)
	平均児	11	8.73 (1.21)	9.27 (0.96)	9.27 (0.86)	8.14 (1.32)	16.68 (2.63)	52.09 (5.78)
	無視児	5	8.80 (1.94)	8.20 (1.47)	9.00 (0.89)	7.00 (1.90)	16.80 (1.94)	49.80 (6.24)
年長児	人気児	8	9.13 (0.78)	9.19 (0.79)	9.75 (0.66)	8.63 (1.22)	16.75 (2.38)	53.44 (4.10)
	拒否児	8	9.25 (0.83)	8.88 (1.05)	9.00 (0.87)	8.38 (1.49)	16.94 (2.16)	52.44 (5.08)
	平均児	9	8.78 (1.13)	9.11 (0.99)	9.67 (0.67)	8.44 (0.96)	15.22 (2.74)	51.22 (4.49)
	無視児	4	9.00 (1.22)	9.50 (0.50)	9.75 (0.43)	7.75 (1.09)	17.00 (1.22)	53.00 (2.12)

表5は、基本的習慣の領域別に人気児、拒否児、平均児、無視児グループの平均粗点とSDを示したものである。各粗点について2(年齢)×4(グループ)の分散分析をした。その結果、すべての領域において年齢とグループの主効果および両者の交互作用は有意でなかった。

- (2) 有能感・受容感・母親の発達期待 表6は、有能感、受容感、母親の発達期待別に人気児、拒否児、平均児、無視児グループの平均得点とSDを示したものである。各得点について2(年齢)×4(グループ)の分散分析をした。その結果、学習面の有能感ではグループの主効果がF(3,50) = 2.80, P < .05で有意となった。各グループの平均値は大きい順に人気児(M = 5.80), 拒否児(M = 5.57), 無視児(M = 5.22), 平均児(M = 4.45)であり、人気児 > 拒否児 > 平

均児となった。しかし、無視児はいずれのグループとも有意差がなかった。運動面の有能感、仲間からの受容感、受容感の合計では、いずれの主効果も交互作用も有意でなかった。有能感の合計ではグループの主効果が $F(3, 50) = 2.98, p < .05$ で有意であった。各グループの平均値は大きい順に人気児 ($M = 11.27$)、拒否児 ($M = 10.93$)、無視児 ($M = 10.67$)、平均児 ($M = 9.15$) であり、人気児 \approx 拒否児 \approx 無視児 $>$ 平均児となった。母親からの受容感では、年齢の主効果が $F(1, 50) = 2.78, .10 > p > .05$ で有意傾向を示し、年中児 ($M = 5.14$) $>$ 年長児 ($M = 4.45$) の傾向にあった。

母親の発達期待では、グループの主効果が $F(3, 42) = 5.10, p < .01$ で有意となった。各グループの平均値は大きい順に人気児 ($M = 7.17$)、平均児 ($M = 6.40$)、拒否児 ($M = 5.58$)、無視児 ($M = 5.33$) であり、人気児 $>$ 拒否児 \approx 無視児であった。しかし、平均児はいずれのグループとも有意差がなかった。さらに年齢 \times グループの交互作用が $F(3, 42) = 4.01, p < .05$ で有意となった。多重比較の結果、年中児では4グループ間に差がないのに対して、年長児では人気児 \approx 平均児 $>$ 拒否児 \approx 無視児であった。また、無視児でのみ年齢差が認められ、年中児 $>$ 年長児であった。

表6 各地位グループの各得点の平均値 ()内はSD

年齢	地位グループ	N	有能感			受容感			N	母親の発達期待
			学習面	運動面	合計	仲間	母親	合計		
年中児	人気児	7	5.86 (1.12)	5.00 (1.31)	10.86 (1.55)	5.86 (1.25)	6.29 (1.03)	12.15 (2.17)	6	7.00 (0.82)
	拒否児	6	5.00 (1.00)	5.50 (0.96)	10.50 (1.71)	5.17 (2.11)	5.17 (1.21)	10.34 (1.70)	5	6.40 (1.02)
	平均児	11	4.64 (1.30)	4.36 (1.37)	9.00 (2.17)	4.82 (1.64)	4.46 (1.97)	9.28 (3.47)	11	5.91 (1.24)
	無視児	5	5.60 (1.02)	6.00 (0.63)	11.60 (1.20)	5.20 (0.75)	5.00 (1.67)	10.20 (2.32)	3	6.33 (0.47)
年長児	人気児	8	5.75 (0.97)	5.88 (0.93)	11.63 (1.41)	5.63 (0.99)	4.25 (1.30)	9.88 (1.69)	6	7.33 (1.11)
	拒否児	8	6.00 (0.50)	5.25 (1.30)	11.25 (1.71)	5.75 (1.64)	4.63 (1.65)	10.38 (2.78)	7	5.00 (0.76)
	平均児	9	4.22 (1.93)	5.11 (1.10)	9.33 (1.89)	5.78 (0.63)	4.44 (1.77)	10.22 (2.20)	9	7.00 (0.82)
	無視児	4	4.75 (0.43)	4.75 (2.28)	9.50 (2.06)	5.00 (1.22)	4.50 (1.12)	9.50 (2.29)	3	4.33 (2.05)

仲間内地位得点と各得点間の相関係数

表7と表8は、幼児全員のデータに基づいて、L得点、D得点、SP得点およびSI得点と各得点との相関係数をまとめたものである。まず各地位得点は、全般に仲間からの受容感と有意な相関を示さなかった。これは、実際に仲間内地位が低い幼児でも仲間からの受容感が低いとは限らないことを示しており、自己認知による受容感と仲間情報による仲間内地位得点とが対応していないことを意味する。次に、L得点やSP得点は母親の発達期待と有意な正の相関を示した。特にこの傾向は年長児に顕著であった。これは、仲間内地位の高い子どもほど、その母親は対人的能力を重視する傾向にあることを意味している。最後に社会生活能力の各領域は、全般にL得

表7 L得点およびD得点と各得点間の相関係数

	L 得 点			D 得 点		
	年 中 児	年 長 児	全 体	年 中 児	年 長 児	全 体
N	32	29	61	32	29	61
仕事の能力	-.06	-.20	-.11	.24	.29	.24 ⁺
からだのこなし	-.05	-.35 ⁺	-.18	.16	.45*	.27*
ことば	-.05	.13	.04	.45**	.32 ⁺	.38**
集団への参加	-.05	-.17	-.09	.29	.08	.20
自発性	-.29	.07	-.10	.33 ⁺	.19	.26*
自己統制	-.33 ⁺	.22	-.06	.33 ⁺	-.16	.10
社会生活能力の合計	-.19	-.03	-.11	.38*	.23	.30*
清潔	-.22	-.12	-.17	.15	.05	.11
排泄	.13	.11	.12	.17	-.15	.05
着衣	-.07	.18	.05	.26	-.36 ⁺	-.02
睡眠	.03	.23	.11	.31 ⁺	.02	.18
食事	-.16	-.05	-.10	.19	.05	.12
基本的習慣の合計	-.08	.06	-.02	.27	-.05	.14
学習面の有能感	.19	.03	.11	-.18	.14	-.01
運動面の有能感	-.14	.25	.05	.20	-.01	.10
有能感の合計	.03	.20	.11	.02	.10	.05
仲間からの受容感	.17	.02	.11	-.19	.26	-.01
母親からの受容感	.22	.01	.12	.09	.19	.13
受容感の合計	.23	.01	.14	-.05	.26	.08
N	28	25	53	28	25	53
母親の発達期待	.01	.61**	.34*	.11	-.22	-.07

⁺: .10 > p > .05 * : p < .05 ** : p < .01

点やS P得点とは負の関係を示し、D得点やS I得点とは正の関係にあった。特に「からだのこなし」、「ことば」、「自己統制」にその傾向が顕著である。これは、母親による社会生活能力評定の高い子どもほど、仲間内受容が低く、むしろ拒否される傾向にあることを示唆する。

重回帰分析の結果

表9は、仲間内地位得点のそれぞれを基準変数とし、年齢、社会成熟度検査の各領域得点、有能感、受容感、母親の発達期待得点の計17変数を説明変数として重回帰分析を行った結果である。なお、母親の発達期待調査の回答人数に揃えたため、人数は全体で53名である。また、重回帰分析はすべて変数増減法を使用した。表9から、L得点を説明する第1変数は母親の発達期待であり、S P得点に関する分析結果とも一致する。つまり、仲間からの受容を高める要因は、子ども自身の個人的能力や成熟度よりも、むしろ母親が対人的能力を重視しているか否かであるといえる。それに対して、D得点やS I得点の第1変数は「ことば」であり、「ことば」の成熟度が高いと母親から評定されている子どもほど仲間から拒否されやすい傾向にあった。「ことば」はコミュニケーション手段として対人的能力を高めると考えると、この結果は解釈できない。おそらく、「ことば」の使用が不適切か量が過剰であるために、かえって仲間から敬遠されていると解釈の方が妥当であろう。いずれにしても、仲間からの拒否を説明する変数は、母親の育児観ではなく、子ども自身の特性であるといえる。

幼児の仲間関係に関する研究

表8 S P 得点およびS I 得点と各得点間の相関係数

	S P 得 点			S I 得 点		
	年 中 児	年 長 児	全 体	年 中 児	年 長 児	全 体
N	32	29	61	32	29	61
仕事の能力	-.20	-.27	-.21	.14	.10	.12
からだのこなし	-.14	-.45*	-.27*	.09	.11	.09
ことば	-.32+	-.11	-.21	.32+	.50**	.38**
集団への参加	-.22	-.14	-.17	.19	-.10	.09
自発性	-.40*	-.07	-.22+	.03	.29	.14
自己統制	-.43*	.21	-.10	.00	.07	.03
社会生活能力の合計	-.36*	-.15	-.25+	.15	.22	.17
清潔	-.24	-.10	-.17	-.05	-.07	-.06
排泄	-.02	.15	.04	.24	-.05	.15
着衣	-.21	.31	.04	.15	-.20	.02
睡眠	-.18	.12	-.04	.27	.28	.27*
食事	-.22	-.06	-.13	.03	.00	.01
基本的習慣の合計	-.22	.07	-.09	.15	.02	.11
学習面の有能感	.23	-.06	.07	.01	.19	.09
運動面の有能感	-.22	.15	-.03	.04	.27	.13
有能感の合計	.01	.06	.03	.03	.32+	.14
仲間からの受容感	.23	-.14	.07	-.01	.31	.09
母親からの受容感	.08	-.10	-.01	.25	.22	.23+
受容感の合計	.18	-.14	.03	.14	.30	.20
N	28	25	53	28	25	53
母親の発達期待	-.07	.46*	.24+	.10	.39+	.23+

+ : .10 > p > .05 * : p < .05 ** : p < .01

表9 各基準変数に関する重回帰分析の結果

説 明 変 数	標準回帰係数	偏相関係数	回帰係数検定値
基準変数 = L 得点	重相関係数 = .34	回帰の有意性検定	F (1,51) = 6.52 p < .05
1 母親の発達期待	.34	.34	F (1,51) = 6.52 p < .05
基準変数 = D 得点	重相関係数 = .49	回帰の有意性検定	F (3,49) = 5.30 p < .01
1 ことば	.48	.47	F (1,49) = 13.81 p < .01
2 母親からの受容感	.24	.26	F (1,49) = 3.50 ns
3 母親の発達期待	-.20	-.21	F (1,49) = 2.32 ns
基準変数 = SP 得点	重相関係数 = .45	回帰の有意性検定	F (4,48) = 3.07 p < .05
1 母親の発達期待	.29	.29	F (1,48) = 4.56 p < .05
2 年齢	.24	.23	F (1,48) = 2.56 ns
3 からだのこなし	-.26	-.21	F (1,48) = 2.31 ns
4 ことば	-.23	-.21	F (1,48) = 2.24 ns
基準変数 = SI 得点	重相関係数 = .65	回帰の有意性検定	F (5,47) = 6.89 p < .01
1 ことば	.54	.53	F (1,47) = 18.33 p < .01
2 睡眠	.38	.40	F (1,47) = 9.04 p < .01
3 清潔	-.34	-.37	F (1,47) = 7.30 p < .01
4 母親からの受容感	.25	.30	F (1,47) = 4.56 p < .05
5 自己統制	-.21	-.22	F (1,47) = 2.31 ns

年齢差・性差の検討

(1) 社会成熟度 表10は、幼児全員のデータを使用して社会生活能力の領域別に粗点の平均値とSDを示したものである。領域別に2(年齢)×2(性別)の分散分析を行った。その結果、年齢の主効果は「仕事の能力」 $F(1,57) = 9.97, p < .01$ 、「からだのこなし」 $F(1,57) = 12.01, p < .01$ 、「集団への参加」 $F(1,57) = 3.12, .10 > p > .05$ 、「社会生活能力の合計」 $F(1,57) = 5.41, p < .05$ でそれぞれ有意であった。つまり、「仕事の能力」では年中児($M = 13.99$) < 年長児($M = 16.30$)、「からだのこなし」では年中児($M = 14.66$) < 年長児($M = 16.54$)、「社会生活能力の合計」では年中児($M = 91.94$) < 年長児($M = 99.03$)であった。また、「集団への参加」でも年中児($M = 16.58$) < 年長児($M = 17.67$)の傾向を示した。性別の主効果は「ことば」で $F(1,57) = 4.22, p < .05$ となり、男児($M = 15.90$) < 女児($M = 16.94$)であった。「自発性」と「自己統制」ではいずれの主効果も交互作用も有意でなかった。

表11は、基本的習慣の領域別に粗点の平均値とSDを示したものである。「着衣」と「食事」については2(年齢)×2(性別)の分散分析を行った。その結果、「着衣」ではいずれの主効果も交互作用も有意でなかった。「食事」では性別の主効果が $F(1,57) = 8.50, p < .01$ で有意となり、男児($M = 15.77$) < 女児($M = 17.24$)であった。さらに年齢×性別の交互作用が $F(1,57) = 10.65, p < .01$ で有意であった。多重比較の結果、年中児では男児≒女児であるのに対して年長児では男児 < 女児であり、男児では年中児 > 年長児であるのに対して女児では年中児≒年長児であった。「清潔」、「排泄」、「睡眠」、「基本的習慣の合計」では各群の分散が等質でなかったため、Welch法によるt検定を使用して群間比較を行った。その結果、「基本的習慣の合計」以外はすべて年齢差も性差も有意でなかった。「基本的習慣の合計」では年長児にのみ性差($t = 3.45, df = 27, p < .01$)が認められ、男児 < 女児であった。

なお、領域間の比較をみるために、社会生活能力については6領域を繰り返し要因とする2×2×6の分散分析を、基本的習慣については食事を除く4領域を繰り返し要因とする2×2×4の分散分析を行った。その結果、前者の分析では主効果として年齢と領域($F = 11.12, df = 5,285, p < .01$)が有意となった。年齢の主効果は「社会生活能力の合計」と全く同一である。各領域の平均値は大きい順に「集団への参加」($M = 17.13$)、「ことば」($M = 16.43$)、「自発性」($M = 16.07$)、「からだのこなし」($M = 15.60$)、「仕事の能力」($M = 15.14$)、「自己統制」($M = 15.10$)であった。多重比較の結果、「ことば」≒「自発性」、「自発性」≒「からだのこなし」、「からだのこなし」≒「仕事の能力」≒「自己統制」以外はすべての領域間に有意差が認められた(集団への参加とことば間およびことばとからだのこなし間は $p < .05$ でその他はすべて $p < .01$)。年齢×領域の交互作用($F = 2.57, df = 5,285, p < .05$)から、この領域間の差異は主に年中児の結果に依存することが分かる。交互作用に関連する各平均値を年齢別に大きい順に示すと、年中児では「集団への参加」($M = 16.58$)、「ことば」($M = 16.06$)、「自発性」($M = 15.78$)、「自己統制」($M = 14.88$)、「からだのこなし」($M = 14.66$)、「仕事の能力」($M = 13.98$)であり、年長児では「集団への参加」($M = 17.67$)、「ことば」($M = 16.81$)、「からだのこなし」($M = 16.54$)、「自発性」($M = 16.36$)、「仕事の能力」($M = 16.30$)、「自己統制」($M = 15.32$)であった。多重比較の結果、年中児では「集団への参加」>「自己統制」≒「からだのこなし」≒「仕事の能力」、「ことば」>「仕事の能力」、「自発性」>「仕事の能力」であった。それに対して年長児では両端の「集団への参加」と「自己統制」間に有意差があるだけでその他の領域間はすべて有意でなかった。

表10 年齢別・性別にみた社会生活能力の各平均値 () 内はSD

年齢	性別	N	仕事の 能力	からだの こなし	ことば	集団へ の参加	自発性	自己統制	合計
年中児	男児	16	13.91 (2.81)	14.50 (1.54)	15.69 (1.76)	16.63 (3.08)	15.97 (2.11)	15.31 (2.47)	92.00 (10.11)
	女児	16	14.06 (3.40)	14.81 (2.32)	16.44 (2.03)	16.53 (2.18)	15.59 (2.71)	14.44 (3.70)	91.88 (13.89)
年長児	男児	14	16.54 (1.99)	16.61 (1.44)	16.14 (1.77)	17.71 (2.12)	15.71 (2.46)	15.14 (2.47)	97.86 (6.67)
	女児	15	16.07 (2.59)	16.47 (2.60)	17.47 (2.03)	17.63 (1.70)	17.00 (2.88)	15.50 (3.88)	100.13 (13.24)

表11 年齢別・性別にみた基本的習慣の各平均値 () 内はSD

年齢	性別	N	清潔	排泄	着衣	睡眠	食事	合計
年中児	男児	16	8.75 (0.90)	8.88 (1.22)	9.19 (0.88)	8.38 (0.86)	16.75 (1.71)	51.94 (3.45)
	女児	16	8.44 (1.62)	8.69 (1.72)	9.31 (0.77)	7.78 (1.83)	16.56 (2.63)	50.78 (7.23)
年長児	男児	14	8.86 (1.12)	8.82 (1.10)	9.29 (0.88)	8.29 (1.22)	14.64 (1.95)	49.89 (4.36)
	女児	15	9.20 (0.83)	9.40 (0.61)	9.73 (0.57)	8.47 (1.26)	17.97 (1.64)	54.77 (2.89)

後者の分析では領域の主効果のみが $F(3, 171) = 15.73, p < .01$ で有意となった。各領域の平均値は大きい順に「着衣」($M = 9.38$)、「排泄」($M = 8.95$)、「清潔」($M = 8.81$)、「睡眠」($M = 8.23$)であった。多重比較の結果、「着衣」>「排泄」>「清潔」>「睡眠」となった(着衣と排泄間は $p < .05$ でその他はすべて $p < .01$)。

- (2) 有能感・受容感・母親の発達期待 表12は、有能感・受容感については全員のデータに基づいて、母親の発達期待については回答者のみに基づいて年齢別・性別に各得点の平均値とSDを示したものである。各得点について2(年齢)×2(性別)の分散分析を行った。その結果、学習面の有能感では性別の主効果が $F(1, 57) = 10.52, p < .01$ で有意となり、男児($M = 4.67$) < 女児($M = 5.74$)であった。運動面の有能感と仲間からの受容感ではいずれの主効果も交互作用も有意でなかった。有能感の合計では性別の主効果が $F(1, 57) = 7.07, p < .01$ で

表12 年齢別・性別にみた各得点の平均値 () 内はSD

年齢	性別	N	有能感			受容感			N	母親の 発達期待
			学習面	運動面	合計	仲間	母親	合計		
年中児	男児	16	4.63 (1.17)	4.94 (1.25)	9.57 (2.00)	5.06 (1.48)	4.13 (1.62)	9.19 (2.94)	15	6.07 (1.34)
	女児	16	5.81 (1.07)	5.31 (1.31)	11.12 (1.76)	5.38 (1.62)	6.19 (1.13)	11.57 (2.26)	13	6.62 (0.92)
年長児	男児	14	4.71 (1.44)	5.21 (1.37)	9.92 (1.75)	5.57 (1.35)	4.36 (1.63)	9.93 (2.66)	12	6.08 (1.75)
	女児	15	5.67 (1.30)	5.40 (1.40)	11.07 (2.11)	5.67 (1.01)	4.53 (1.45)	10.20 (1.87)	13	6.31 (1.44)

有意となり、男児 ($M = 9.73$) < 女児 ($M = 11.10$) であった。母親からの受容感では年齢の主効果が $F(1,57) = 3.35, .10 > p > .05$ で有意傾向を示し、年中児 ($M = 5.16$) > 年長児 ($M = 4.45$) の傾向にあった。さらに性別の主効果が $F(1,57) = 8.28, p < .01$ で有意となり、男児 ($M = 4.24$) < 女児 ($M = 5.39$) であった。また、年齢×性別の交互作用が $F(1,57) = 5.88, p < .05$ で有意となった。多重比較の結果、年中児では男児 < 女児であるのに対して年長児では男児 = 女児であり、男児では年中児 = 年長児であるのに対して女児では年中児 > 年長児であった。受容感の合計では性別の主効果が $F(1,57) = 4.08, p < .05$ で有意となり、男児 ($M = 9.54$) < 女児 ($M = 10.90$) であった。母親の発達期待ではいずれの主効果も交互作用も有意でなかった。

考 察

仲間内地位グループ間の比較について

「ことば」、「学習面の有能感」、「有能感の合計」および「母親の発達期待」では、4つの地位グループ間に差異が見られた。まず「ことば」について考察する。拒否児は平均児や無視児よりも成熟度が高いと母親から評定されていた。人気児は拒否児の次に高い評定を受けていた。表7と表8の相関係数を見ると、「ことば」は仲間からの受容得点(L得点)よりも拒否得点(D得点)や社会的影響力得点(SI得点)と有意な相関関係にあった。同様に表9の重回帰分析でも、「ことば」はD得点やSI得点の有意な説明変数であった。これらの結果は、ことばの成熟度が高い子どもほど仲間から拒否されやすく、その意味で仲間集団への影響力が強くと無視できない存在であることを示唆している。田研式社会成熟度診断検査の「ことば」領域は、自分の名前・住所や欲求の言語表現能力、挨拶ことばや返事および他者との言語コミュニケーション能力など、いわば言語の発達度を評定する項目から構成されている。したがって母親の評定をそのまま受け入れると、拒否児は人気児と同程度かそれ以上の言語発達を遂げていることになる。人気児以上に言語発達の進んだ拒否児がなぜ仲間から拒否され、人気児は拒否されないのだろうか。本研究の範囲内では断定できないが、おそらく言語使用の質的側面に関係しているのではないかと思われる。前田(1989a)は、本研究の対象児とは異なるが、同一幼稚園の幼児について教師による社会的スキル評定を求めた。その結果、拒否児は人気児や平均児に比べて、相手の感情を傷つけるような否定的発言、仲間に対する要求や指示、自分勝手な会話などが多くと評定されていた。本研究と前田(1989a)の結果を総合すると、拒否児の言語能力は高く発言量も多いが、状況や相手を考慮した適切な言語使用を行っていない傾向にある。相手の立場や感情を考慮しないで攻撃的な発言を多く示すために、拒否児は仲間から敬遠されている可能性が強い。一般的言語能力や発言量だけでなく、具体的場面で人気児と拒否児がどのような会話スタイルを使用しているかについてさらに詳細な分析が必要とされる。

「学習面の有能感」および「有能感の合計」では、拒否児や無視児は人気児と同程度の有能感を抱えていることが分かった。むしろ、平均児の有能感が最も少なかった。「運動面の有能感」には地位グループ間差がないことから、「有能感の合計」の地位グループ間差は主に「学習面の有能感」の地位グループ間差に原因していると考えられる。拒否児の有能感が高いことについては、2つの可能性が考えられる。第1は、学習面の有能感が「ことば」の発達と関係している可能性である。表2から分かるように、学習面の有能感項目は項目1の折り紙と項目2のお絵かきを除くと、

ほとんど言語能力や一般知識に関するものであった。拒否児は「ことば」の発達が優れていると母親から評定されていたので、言語能力に関する学習面の有能感も高かったのではないだろうか。しかし、この解釈には次のような問題点が生じる。①有能感は拒否児だけでなく無視児も高いが、無視児の「ことば」の評定は拒否児よりも低い。②「ことば」領域と学習面の有能感との相関係数を調べてみると、年中児で $r = .25$, NS , 年長児で $r = .36$, $.10 > p > .05$ であり、有意な相関関係とは言い難い。

第2は、拒否児に限らず幼児は自分の有能感や受容感について過大評価する傾向にあるのではないかという可能性である。この可能性は、以下の3つの証拠から裏付けられる。①学習面の有能感、運動面の有能感、仲間からの受容感、母親からの受容感のすべてにおいて、人気児、拒否児、無視児の3グループ間には差がない。特に仲間情報と照合できる仲間からの受容感でも、4つの地位グループ間に差がない。また、仲間からの受容感は地位得点のいずれとも有意な相関関係を示していない(表7と表8参照)。これらの結果は、仲間から相対的に拒否されている幼児でも、本人自身は拒否感や孤独感をほとんど抱いておらず、仲間から十分に受容されていると自己評定していることを示唆する。②母親からの受容感を除くと、学習面の有能感、運動面の有能感、仲間からの受容感の3得点では年齢差も認められない。これは、「仕事の能力」、「からだのこなし」、「集団への参加」、「社会生活能力の合計」で年長児が年中児よりも成熟しているという母親の報告と対応しない。③幼児の有能感と受容感を調べた Harter and Pike(1984) や桜井・杉原(1985)でも、幼児の自己評定が過大傾向を示すことを報告している。Harter and Pike(1984)のデータに基づいて比率に換算すると、学習面の有能感88%、運動面の有能感83%、仲間からの受容感73%、母親からの受容感75%となる。桜井・杉原(1985)のデータについて同様の換算を行うと、学習面の有能感89%、運動面の有能感86%、仲間からの受容感82%、母親からの受容感74%となる。本研究では表12の平均値から同様の比率換算を行うと、学習面の有能感は年中児75%で年長児74%、運動面の有能感は年中児73%で年長児76%、仲間からの受容感は年中児75%で年長児80%、母親からの受容感は年中児74%で年長児64%となる。3つの研究結果は、いずれも幼児が自分の有能感や受容感を肯定的方向に過大評価することを示唆している。本研究の幼児の比率が少し低いのは、方法で述べたように桜井・杉原(1985)よりも少し困難度の高い項目を含めたためであろう。

しかし、たとえ幼児の自己評定が過大傾向にあるとしても、平均児の有能感が他のグループよりも有意に低かったことを説明できない。この結果は、おそらく有能感の男女差に影響されたものと考えられる。「学習面の有能感」と「有能感の合計」では、女兒が男児よりも有意に高かった(表12参照)。表1から各地位グループの性別構成を見ると、人気児では男児6名(40%)と女兒9名(60%)、拒否児では男児6名(43%)と女兒8名(57%)、無視児では男児4名(44%)と女兒5名(56%)であり、3グループの男女構成比はほぼ同等である。それに対して、平均児では男児12名(60%)と女兒8名(40%)であり、男児の比率が多くなっている。有能感の低い男児を多く含んでいた分だけ、平均児の有能感が他のグループよりも低くなったのではないかと考えられる。

ところで、有能感や受容感に関する幼児の自己評定が高いこと自体は望ましいことであるが、同時にいくつかの新たな問題を提起する。その第1は、もっと有効で信頼性の高い幼児用自己評定測度の開発が要求されることである。第2の問題は、特に仲間からの受容感に関連する。仲間から相対的に拒否または無視されている幼児でも、人気児と同等の受容感を抱いていた。この結

果は、仲間評定と自己評定との不一致を意味するだけでなく、拒否児や無視児はなぜ仲間から拒否されたり無視されるかについて意識したり考える必要性を感じていないことを意味する。社会的スキルに関する最近の研究は、仲間との肯定的相互作用を支える種々の社会的スキルが仲間内人気度や仲間からの受容度と密接に関係することを明らかにしている (Gottman, Gonso, & Rasmussen, 1975; Hymel & Rubin, 1985; 前田, 1989a; Michelson, Sugai, Wood, & Kazdin, 1983)。しかし、仲間内評判に気づいていない幼児では、本人の自覚によって対人行動が改善される可能性は極めて少ないであろう。それだけに拒否児や無視児の対人行動をできるだけ早期に改善しようとする社会的スキル訓練を行う場合、幼児では教師や親あるいは仲間からの情報が特に重要であるし、周囲からの注意と積極的な働きかけが必要になるだろう。

母親の発達期待では、人気児の母親が拒否児や無視児の母親よりも対人的能力を重視していた。特に、年長児ではこの傾向が顕著であった。この結果については、母親が自分の子どもの能力に即した期待水準を維持しているとも解釈できるし、逆に対人的能力に関する母親の期待や要求・しつけが低いため幼児の対人的スキルが不十分であったり不適切となり、その結果として仲間から拒否されたり無視されるようになるとも解釈できる。あるいは両者の循環作用なのかもしれない。いずれにしても、幼児同士の横の関係である仲間関係に対しても、家庭環境とか両親の価値観や育児観が背景的要因として重要な役割を果たしていることが示唆される。

年齢差・性差について

まず年齢差について考察する。社会成熟度診断検査の「仕事の能力」、「からだのこなし」、「集団への参加」、「社会生活能力の合計」では年長児が年中児よりも成熟度が高く、「食事」では男児において同様の結果が認められた。上田 (1963) は、同一の社会成熟度診断検査を担任教師と母親に実施している。その結果、「社会生活能力の合計」の平均得点は年中児の母親評定が95.29で教師評定が77.46であり、年長児の母親評定が99.85で教師評定が88.77であった。いずれの年齢でも母親評定は教師評定よりも有意に高かった。表10から、これに対応する本研究の値を算出すると、年中児の母親評定が91.94で年長児の母親評定が99.03である。両研究の母親評定はかなり類似していることが分かる。したがって、本研究でも母親の評定は比較的甘い傾向を示していた可能性が強い。幼児の情報を周囲の大人から収集する場合、判断基準が教師と母親では異なることを留意しなければならない。しかし、いくつかの領域で年齢差が見られたことは、母親の評定が甘い傾向にあるとしても、社会成熟度診断検査がある程度年齢差を捉え得る妥当な検査であることを確認する。基本的習慣の「清潔」、「排泄」、「着衣」、「睡眠」に年齢差がなかったのは、表11から分かるように、これらの項目ではどの幼児も極めて高い評定を受けていたからであろう。また、「自発性」や「自己統制」の項目は母親が直接観察しにくい項目から構成されているので、少数の観察事実や推測に頼る部分が多く、明確な年齢差を生じ得なかったのではないかと考えられる。幼児自身の回答では、母親からの受容感にのみ年齢差が見られた。しかも他の項目と異なり、年中児が年長児よりも受容されていると回答し、女兒にこの傾向が顕著であった。これは、幼児後期における親子関係のあり方が男女で異なる可能性を示唆する。このことは、以下の項目で性差が見られたこととも関連する。

性差は「ことば」、「食事」、「基本的習慣の合計」、「学習面の有能感」、「有能感の合計」、「母親からの受容感」、「受容感の合計」で認められた。いずれも女兒が男児よりも高い得点を示した。つまり、母親は男児よりも女兒の方が成熟していると見ており、幼児の側でも女兒が男児よりも

高い有能感や受容感を抱いていた。この対応関係から、以下のような女兒像が想定される。女兒は男児に比べて、母親との言語コミュニケーションが良好であり、母親の指示に比較的よく従う。そのため母親は女兒に対して承認や強化を与える機会が多く、社会成熟度も高く評定しやすい。母親からの肯定的評価や母子間の肯定的相互作用の結果として、女兒は男児よりも高い有能感や受容感を抱くようになる。母親との関係ではないが、幼稚園や小学校の教師は一般に活動的で攻撃的な男児よりも従順でおとなしい女兒を好みやすく、承認や肯定的強化を与えやすいと報告されている (Biber, Miller, & Dyer, 1972; Helton & Oakland, 1977)。また、幼稚園の教師による社会的スキルの評定では、性差が顕著な領域とそうでない領域があった。例えば、男児は否定的発言が強く、女兒は共感的反応を示しやすい(前田, 1989 a)。性役割行動は親子関係を含む対人関係の中で形成・発達することを考えれば、仲間適応の個人差や性差が仲間関係や大人との対人関係の中でどのように形成・発達するのか、その基本的影響要因を明らかにすることは、仲間関係や親子関係の改善にとって重要な情報を提供することになる。

付記 本研究の資料収集にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属幼稚園の先生方と園児の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては、露口範子さんを中心として、永井清美さん、三浦元子さん、正岡聡子さん、吉雄智津子さん、渡辺祐子さんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。

引用文献

- 東洋・柏木恵子・Hess, R. D. 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究—東京大学出版会
- Biber, H., Miller, L., & Dyer, J. 1972 Feminization in preschool. *Developmental Psychology*, 7, 86.
- Bornstein, M., Bellack, A. S., & Hersen, M. 1977 Social skills training for unassertive children: A multiple-baseline analysis. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 10, 183-195.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school: A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H. 1982 Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, 18, 557-570.
- Conger, J. C., & Keane, S. P. 1981 Social skills intervention in the treatment of isolated or withdrawn children. *Psychological Bulletin*, 90, 478-495.
- Furman, W., Rahe, D. F., & Hartup, W. W. 1979 The rehabilitation of socially withdrawn preschool children through mixed-age and same-age socialization. *Child Development*, 50, 915-922.
- Gottman, J., Gonso, J., & Rasmussen, B. 1975 Social interaction, social competence, and friendship in children. *Child Development*, 46, 709-718.
- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.
- Harter, S., & Pike, R. 1984 The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*, 55, 1969-1982.
- Hartup, W. W. 1983 Peer relations. In E. M. Hetherington (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 4. Socialization, personality, and social development*, pp. 103-196. New York: Wiley.
- Helton, G. B., & Oakland, T. D. 1977 Teachers' attitudinal responses to differing characteristics of elementary school children. *Journal of Educational Psychology*, 69, 251-265.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*, Vol. 2, pp. 251-297, Greenwich, JAI Press.
- 前田健一 1988 a 幼児の仲間関係に関する研究—仲間内地位, 知能, 道徳的判断の関係—愛媛大学教育実践研究指導センター紀要, 第6号, 113-122.

- 前田健一 1988 b 幼児の仲間内地位と統制の位置 日本教育心理学会30回大会発表論文集, 42-43.
- 前田健一 1989 a 幼児の仲間内地位と社会的スキルの教師評定 日本教育心理学会31回大会発表論文集, 152.
- 前田健一 1989 b 幼児の仲間関係に関する研究——仲間内地位と友人関係網の理解度——日本教育大学協会幼児教育部門会 幼児教育研究, 1989年版 pp.92-110. 川島書店
- Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E. 1983 *Social skills assessment and training with children*. Plenum. 高山巖・佐藤正二・佐藤容子・園田順一 (訳) 1987 子どもの対人行動——社会的スキル訓練の実際—— 岩崎学術出版社
- Rubin, K. 1982 Social and social-cognitive developmental characteristics of young isolate, normal, and sociable children. In K. Rubin, & H. Ross (Eds.), *Peer relationships and social skills in childhood*. pp. 353-374. New York: Springer-Verlag.
- 桜井茂男・杉原一昭 1985 幼児の有能感と社会的受容感の測定 教育心理学研究, 33, 237-242.
- 鈴木清 1961 田研式社会成熟度診断検査 日本文化科学社
- Urbain, E. S., & Kendall, P. C. 1980 Review of social-cognitive problem-solving intervention with children. *Psychological Bulletin*, 88, 109-143.
- 上田敏見 1963 三年保育児の発達心理学的研究 (II) ——社会成熟度・社会測定的地位を中心として—— 奈良学芸大学附属幼稚園研究紀要, 第2号, 2-11.
- Weissberg, R. P., Gesten, E. L., Rapkin, B. D., Cowen, E. L., Davidson, E., Flores de Apodaca, R. F., & Mckim, B. J. 1981 Evaluation of a social problem solving training program for suburban and inner city third grade children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 49, 251-261.
- Zigler, E., & Trickett, P. K. 1978 IQ, social competence, and evaluation of early childhood intervention programs. *American Psychologist*, 33, 789-798.